

中学校各教科等担当指導主事連絡協議会 伝達事項

1 美術科における教育課程実施上の課題と指導上の留意事項

(1) 学習指導要領の趣旨やねらいを実現するための授業づくりの一層の充実

① 育成する資質や能力を明確にした指導計画を作成する。

- ・ 学習指導要領の趣旨や内容の理解を図る。

完成した作品や活動のイメージだけの授業は、学習指導要領を理解していなくとも行うことができる。生徒の学びのイメージや育成する資質や能力を明確にした授業を行うことが大切である。

- ・ 第1学年の美術文化に関する鑑賞の学習など、新しく入った内容について、再度確認する。

美術文化の学習では、過去の文化遺産としての美術作品などを鑑賞させることは大切であるが、さらに遠い過去から現代に続く大きな歴史の中でつくられたものであることを意識させる必要がある。生徒は今生きている現代から過去を見ることになるので、現代社会の中で身に付けた価値観などを生かして、過去の作品を理解し、伝統や文化に対する関心を高める指導が重要である。

- ・ 指導計画の作成と内容の取扱いについて再度確認する。

下記の図「A表現」の指導計画の作成例Ⅰ・Ⅱ等を参考にしながら、描く活動とつくる活動のいずれも経験させるようにする。描く活動とつくる活動の学習に著しい偏りが生じないように配慮するとともに、様々な美術表現に親しめるように全体として調和のとれた指導計画を作成することが大切である。

「A表現」の指導計画の作成例Ⅰ

A表現 学年	(1)と(3)		(2)と(3)	
	描く活動	つくる活動	描く活動	つくる活動
第1学年	○	○	○	○
第2学年	○			○
第3学年		○	○	

「A表現」の指導計画の作成例Ⅱ（第1学年は同じ）

第2学年		○	○	
第3学年	○			○

② 学習評価の具体的な進め方について再度確認し、題材の特性を踏まえた効果的・効率的な評価を工夫する。

- ・ 評価の観点及びその趣旨についての理解を図る。

新学習指導要領の下での学習評価については、生徒の「生きる力」の育成を目指し、生徒一人一人の資質や能力をより確かに育むようにするため、学習指導要領に示す目標に照らしてその実現状況をみる評価を着実に実施し、生徒一人一人の進歩の状況や教科の目標の実現状況を的確に把握し、学習指導の改善に生かすことが重要であるとともに、学習指導要領に示す内容が確実に身に付いたかどうかの評価を行うことが重要である。

- ・ 各観点の趣旨を生かしながら適切な評価規準の設定が行われるようにすることや、評価方法の考え方の理解を図る。

**中学校 美術科**

「題材の評価規準」は、題材ごとに設定する評価規準であり、題材の目標と評価との関連を確認したり、題材における評価の重点を捉えたりする場合に有効である。

「学習活動に即した評価規準」は、授業の中での具体的な学習活動の評価規準であり、実際の評価は、これに基づいて行うことになる。

評価の観点及びその趣旨

	関心・意欲・態度	思考・判断・ <b>表現</b>	技能	知識・理解
学習評価における観点	これまでと同様、各教科の学習に即した関心や意欲、学習への態度等を対象としたもの	思考・判断した過程や結果を言語活動等を通じてどのように表出しているか	従前の「技能・表現」が対象としていた内容	これまでと同様、各教科において習得した知識や重要な概念を理解しているかどうか
美術科の評価の観点	美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
その趣旨	美術の創造活動の喜びを味わい、主体的に表現や鑑賞の学習に取り組もうとする。	感性や想像力を働かせて豊かに発想し、よさや美しさなどを考え心豊かで創造的な表現の構想を練っている。	感性や造形感覚などを働かせて、表現の技能を身に付け、意図に応じて表現方法などを創意工夫し創造的に表している。	感性や想像力を働かせて、美術作品などからよさや美しさなどを感じ取り味わったり、美術文化を理解したりしている。

③ 言語活動の充実についての趣旨やねらいの理解を図る。

- 言語活動の充実に関する基本的な考え方を再度確認し理解を図る。

美術科においては、表現や鑑賞の能力を育成する観点から、形や色彩、材料の感情効果やイメージなどを捉えながら、アイデアスケッチ等により発想や構想を練ったり、作品などに対する自分の価値意識を持って批評し合うなどして幅広く味わったりするなどの学習活動を充実する。

表現においては、発想や構想の能力を高めるために、アイデアスケッチで構想を練ったり、言葉で考えを整理したりするなどの学習を一層充実する。

鑑賞においては、鑑賞の能力を高めるために、作品などに対する自分の価値意識を持って批評し合うなどして、造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫、美と機能性の調和、生活における美術の働きなどを感じ取り、対象の見方や感じ方を広げるなどの学習を一層充実する。

指導計画の作成に当たっては、形や色彩、イメージなどの〔共通事項〕を視点に、美術科で育てようとする資質や能力を具体的に育成するような言語活動の充実を工夫することが重要である。

言語活動を充実すること自体が目的ではなく、言語活動により、基礎的・基本的な知識及び技能の習得、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力を育むことを目指すことに留意する必要がある。このため、基礎的・基本的な知識・技能の習得を図るための繰り返し学習等を削減したり、話合いの時間を大幅に増やしたり、新たに言語活動のための単元を特設したりするなどの対応は必ずしも必要ではない。

2 参考となる資料等

- 言語活動の充実に関する指導事例集（文部科学省）
- 評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（国立教育政策研究所）